

平成 30 年 1 月 20 日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）留学終了報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

記

1. 報告者情報

所属/学年	法文学部 人文学科 2年	性別	女
卒業/修了 予定年月日	2020年 3月31日		

2. 留学の概要

留学期間	開始年月日	2017年4月27日	終了年月日	2018年1月16日
留学のタイトル	オーストラリアの教育活動と実践			
留学の目的と概要（実践活動部分には、下線を引いて下さい）（700字程度）				
<p>オーストラリアの小学校教育を通して、日本に限らない幅広い教育方法や方針に触れ、自分の教育観を柔軟にし、将来に活かすこと。また、日本人のほぼいない状況に自らを置き、英語を用いた異文化の人々との会話を増やすことでコミュニケーション能力、英語能力の向上も考えている。実践活動としては、オーストラリアのヒューズ小学校で <u>ALT(Assistant Language Teacher)</u>として日本語授業のアシスタントを行ったり（4月～12月）、現地で行われる <u>Japan Fun Day</u> と呼ばれる日本文化を紹介する祭りで、企画運営の補助をしたりする。12月以降、学校終了後は、他の小中学校や、日本人のための補習校、日本語学校などの見学を行う。</p> <p>私の父が教師であり、その活動を日々見ている、また自分自身も塾講師としてアルバイトをする中で日本の教育方法に疑問を感じることも多くあった。そして、より効率的で、楽しい授業を作り上げるにはどうすればいいのか、どんな工夫があるのかと考えていたところ、海外に住む親戚からヨーロッパの教育制度や学校の様子などを聞いたり、大学の授業で他国出身の講師の授業を受けたりする機会があり、その際、日本の教育にも取り入れるべきと思われる点や、日本の教育の良い点も見えてきた。そのような見聞きしたものだけでなく、自分の足で現地の小学校に出向き、実際の海外の教育はどういったものなのか体験するため、今回の留学を決意した。</p> <p>また、2年前にオーストラリアのブリスベンに1か月語学留学をしたことがあったが、語学学校内では英語圏の友達ができにくかったため、英語能力は予想ほど伸びなかったという反省点がある。その反省を生かし、今回はホームステイのみ、日本人も少ない環境で勉強のできるこの <u>JTA (Japanese Teaching Assistant)</u> 留学プログラムを選択した。</p>				

3. 受入れ機関情報及びスケジュール

(1) 受入れ機関情報

	1ヶ所目の機関	2ヶ所目の機関	3ヶ所目の機関
国・地域	オーストラリア		
都市名	キャンベラ		
機関名 (英語)	Hughes Primary School		

機関名 (日本語)	ヒューズ小学校		
受入れ 機関 URL	http://www.hughesps.act.edu.au/		

(2) 留学期間中のスケジュール 留学月数 (9) ヶ月 / 授業料申請 (有・無○)

年 月	留学先機関	国・地 域	主な活動
2017 年 4/27~12/15	ヒューズ小学校	オースト ラリア・ キャンベ ラ	ALT として日本語授業の補助
2017 ~ 2018 年 12/16~1/16	個人活動	オースト ラリア・ キャンベ ラ	学校終了後は、他校や日本人専用の補習校などの見学

(3) 参加したプログラム (有○・無) (複数選択可)

本学の協定校交換留学	名称記入	本学の協定校交換 留学以外のプログラム	名称記入
本学以外の機関による留学プログラム	JTA プログラム		

4. 留学の成果及びその測定方法 (300 字程度)

成果発表 (論文、作品等)	○	単位取得		外国語能力	○	その他	
<p>帰国後、鹿児島県内の小中学校の先生方、将来教師を目指す学生に向けて、留学で学んだこと、オーストラリアの語学教育などについて、簡単な成果発表会を予定している。具体的には、人文学科所属の Steve Cother 教授の指導を仰ぎ、同じく ALT としてオーストラリアに留学していた 4 人の学生とともに、教育学部の教室を借り、2 月 4 日に午前、午後二回に分け成果発表会を行う。</p> <p>日本でも小学校から英語教育 (第一外国語) が始まってはいるが、英語が定着している生徒は少ないといえるだろう。そこで、海外の外国語授業の工夫を日本でも取り入れて英語学習は楽しいものだという事を伝えると同時に、英語を教える教師側も、従来の方法に縛られない柔軟な教育を提案できるきっかけとなるような発表会にしたい。</p> <p>また、外国語能力の向上の確認のため、5 月に TOEIC を受験する予定である。3 月には個人でヨーロッパを周遊し、英語力の向上を身をもって実感することができた。</p> <p>(TOEIC スコア 690 点 : 2018 年 7 月時点)</p>							

※当てはまる項目に○を付し、具体的に説明して下さい (複数回答可)

5. 上記 4. も含め、留学の目的がどのように達成できたか、留学で得たことは何か記述してください。

(500 字程度)

8 か月間オーストラリアの小学校で過ごしてみて、授業は勿論、休み時間の過ごし方、各行事の運営、子供たちの態度など、日本の学校とは全く異なっていることを知った。学校生活の過ごし方が日本よりものびのびとしていたので、子供たちの価値観もより自由なもので、クリティカルシンキング（事象に対して客観的視点を持ち、疑問をもって考えることで解決策を導く思考）を伸ばす教育であると感じた。指定の教科書は無く、スライドや動画、クラフトなどを中心に、楽しく子供たちに自分から考えさせる内容の授業が多かった。宿題や塾などはほとんど無く、帰宅後も子供たちはのびのびとしており、ホームステイ先は早寝早起きが印象的だった。健康的で余裕があり、効率的な生活は見習うべき点だと深く感じた。教育は、学校内だけでなく家や、クラブ活動など様々な環境と密接につながっているということが分かり、日本ももっと幅広く子供たちを取り巻く環境を見直していくべきではないかと感じた。

また、もう一つの目標であった英語力だが、日常に差し支えないほどの会話はすらすらできるようになったので大満足である。この調子で勉強を続けて、ビジネス英会話も習得できたらと思う。TOEIC を受験し、英語力向上について、より具体的に確認するつもりだ。

6. 留学後に行う鹿児島地域を活性化する活動について述べてください。(500 字程度)

他の JTA (Japanese Teaching Assistant) 4 人と、オーストラリア (キャンベラ) の教育方針、ALT の働き、ネイティブスピーカーが教室にいる場合の子供たちの言語能力の変化、など 5 人それぞれの視点から、各学校の説明も踏まえた、2 時間ほどの発表会を 2 回行う。私は自分のヒューズ小学校の特徴と、小学校内に設置されている IEC (Introductory English Centre) とよばれる英語が第一言語ではない子供たちのための学校 (語学学校のようなもの)、またキャンベラに住む日本人の子供たちのための補習校 (日本に帰国した際、日本の学校の進度についていけるようにするため) の運営や、授業の様子など、詳しい中身を紹介するつもりである。このヒューズ小学校は、大使館が周りに多く、その子供たちが通うので、バイリンガルの子供たちがいることは今“ふつう”になっている。そんな、よりインターナショナルに対応している学校の様子を知ること、グローバル化が進む日本の、未来の学校体系などが見えてくるだろうと思う。

この発表が、鹿児島の先生方、これから先生になろうと思っている学生たちへの新しいアイデア、日本の未来の教育について考えるきっかけになればいいと思う。

7. 留学を今後の自分の生き方にどのように活かすか、留学成果を活用して将来鹿児島地域に貢献できることは何か記述して下さい。(500 字程度)

今回の留学で一番成長した部分は、挑戦する心、目標を実現させていく力、問題解決能力だと思う。日本とは全く異なる文化の中、知らない家族と生活し、日本語も通じない日々の中、自分で目標を立て前に進み、解決方法を探りながら過ごしたことで、「自分の人生を歩んでいる」という実感を得ることが多くあり、キャリアデザインや、将来のことなど現実的に考えられるようになった。英語力や教育方法、文化など学んだことは数えきれないが、この留学で培ったスキルや想いを、将来の夢や、理想像など様々なことにぶつけていけたらと思う。

これからもっとグローバル化が進むと、鹿児島にもたくさんの外国人が旅行で訪れ、移住者も増加すると考えられる。そこで鹿児島の観光地についてや、歴史、道案内など、すらすらと説明できたら、もっと鹿児島の良さを多くの人に知ってもらえるのではないかと考えた。まだまだ日本には英語を流ちょうに話せる人は少ないと思うので、第二言語習得のメリットや必要性など鹿児島の若者たちに伝えていければと思う。また、留学生とも積極的に交流を持ち、他国から見た鹿児島の魅力について語り合いながら、内部からはわからない新しい発見をしてみたい。

平成 30年 1月 31日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）
留学後地域活性化報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

記

1. 報告者情報

所属/学年	法文学部 人文学科 2年	性別	女
卒業/修了 予定年月日	2020年 3月 31日		

2. 留学後の鹿児島地域を活性化する活動の概要を、留学の成果との関係がわかるように記述してください。(700字程度)

【活動のタイトル】 鹿児島大学 JTA(Japanese Teaching Assistant)留学成果発表会

【活動の期間】 2018年 2月 2日～ 2018年 2月 4日

【活動の概要】

おおまかな内容としては、私たちが活動を行ったオーストラリア（キャンベラ）の小・中学校の教育方針や授業内容を報告し、紹介した。また、ALTの活用法、有用性についても言及した。

詳しい流れとしては、はじめに、オーストラリアの教育制度の歴史に少し触れ、オーストラリアの教育の特徴である教科書を用いないやり方、日本との違いや授業内の詳しい教え方の例などを取り上げながら教育方針について説明した。それから、Evatt 小学校と、Kaleen 小学校を比べ、オーストラリア人が教える日本語、日本人教師が教える日本語の違い、学習進度の差を示した。習熟度別に行う厳しめの授業から、生徒みんなが楽しめるアクティビティを含めた授業まで、広く紹介した。そこで、自分の経験も含め、それぞれの教師のやり方に応じて ALT の活動内容も異なってくるので、ALT には柔軟さと、自国についての広い知識が問われると感じた。私のスライドでは、自身の学校である Hughes 小学校に開講されていた IEC(Introductory English Centre)と、隣に位置していたキャンベラ補習校の紹介を行った。多民族・多文化国家であるオーストラリアであるからこそ、こういった施設の充実がはかれる。グローバル化がすすむこれからの日本にもこういったインターナショナルな学校は増えていくことが予想できるので、授業の作り方や生徒への対応など学べる点は多々あると考え、また他の 4 校にはこの施設は

ないこともあり、題材に選んだ。最後に、ZPD(Zone Proximal Development) に焦点をおいている方針、この ZPD を意識した学習に ALT はおおいに役立つことを説明しまとめた。ZPD とは日本語で最近接領域といい、個人の問題解決水準を 3 つに分けたうちの、(自主的に解決できる問題、指導や援助のもとで解決可能な問題、解決不可能な問題) 2 つ目、指導や援助のもとで解決可能な問題を指す。ALT が教師と協力して、この ZPD 領域の問題を適切に指導、援助してあげることで、子供たちの理解度はあがるだろうということだ。指導者が 2 人に増えることで、指導の効率も上がり、また子供達一人一人の段階を把握し柔軟な対応をすることがより可能になる。

今回の発表は、現職の先生 6 名、教員を目指す大学生 12 人で計 18 名の方に発表を聞いていただけた。発表中、オーストラリアの授業の様子や、教育方針についての説明、写真のスライドが出るたびに、驚かれ、感心されている様子だった。実際に他国の小学校、中学校で教えた経験、日本の学校との違いを、日本の教育を担う現職の先生方、これから教員となる学生の皆さんに伝えることができ、新しい視点や、時代に沿った方法を提案し共有することができたのではないかと思います。私の発表であった IEC、キャンベラ補習校も、これからグローバルな日本となっていくうえで必要になってくる施設だ。大都市とは違い、鹿児島はまだまだグローバル社会とは言い難い。だからこそ、早い段階で、多民族社会に適した施設の仕組みや運営、内情を一人でも多くの教育関係者に伝えることができ、地域活性化に微力ながらも貢献できたのではないかと思います。

3. 鹿児島地域を活性化する活動の成果と今後の課題と展望について述べてください。(700 字程度)

将来教員を目指す学生、鹿児島の現職の先生方向けに、オーストラリアで学んできた現地の教育観や授業の進め方を伝えるためプレゼン、レジュメを作成し、2 時間弱ほどの発表会を 2 回行った。それに伴って、鹿児島大学の SNS、友人グループでの宣伝、また鹿児島大学付属小学校、中学校に伺い、お知らせをお届けするなど、広報活動も行った。当日は 18 名の方に聞いていただくことができた。

成果としては、オーストラリア(キャンベラ)の教育観や方法、また ALT の有用性を計 5 つの小中学校の具体的な例をもとに紹介することができたこと、写真を交えながら現在のキャンベラの学校の様子をそのまま伝えることができたこと、がある。個人的には、他校の授業の様子や、ALT の活動内容まで勉強することができたことも挙げたい。学校ごとで進度も方法も大きく異なっていて、各学校と比較することで客観的に自分の学校を見つめることもできた。

今後の課題、展望としては、英語教師になるという夢を目指す中で、自分がどのように求められているのか、どんなスキルが必要になってくるのかを早々に把握していくこと。そして、広い視点で様々な知識を蓄えておくこと。言葉を教えるということはその国の文化や、生活も教えていくということであり、話せるというだけでは、その言語の仕組みは教えられても、楽しさやその国の良さを伝えるのは難しい。実際今回の留学中、小学校で相撲と十二支について質問されることが多かったが、相撲

のルールなど知らなかった私ほうまく答えることができず悔しい思いをした。そこで相撲について語る事ができれば、子供たちはまた一つ日本に関する興味、楽しみを見つけることができたかもしれないのと思うと非常に残念であった。発表でも述べた ALT の活用方法にもつながるが、このような、文化や独特の慣習などを通して楽しさを伝え、子供たちのやる気、関心を引き出すことが、結果として言語能力の向上につながることであり、私がこれから重視していきたいと思った点である。